

「BIMの活用に苦労している人ほど、ビューアの大切さを理解しているはず」と、ディックス(名古屋市の)の田村尚希情報技術部長は力を込める。2015年に販売したビューアソフト『Vizit Viewer』(ビジットビューア)は、一貫BIMの導入に踏み切った長谷工コーポレーションのデザインレビューツールとして採用されるなど、BIM生産を下支えするツールとして急成長している。

ビジットビューアの開発コンセプトは「普段使いのできるビューア」。プロジェクト関係者の誰もが簡単に情報共有できるよう、あえて余分な機能を設けず使いやすさだけにとことんこだわった。田村氏は「BIMの高度化でデータが大容量になり、スピーディーな共有がしにくい状況を開いたかった」と訴える。



VizitViewerではモデル上で複数人がやり取り

ゼネコンの施工図支援を主体に活動する同社が、新規事業として情報技術と構造の2部門を立ち上げたのは14年のことだ。もともとゲーム界のエンジニアアだった田村氏はゲーム操作の手軽さをBIMでも実

普段使いビューアで情報共有

現したいと考える中で転機が訪れた。長谷工コーポレーションから「打ち合わせで手軽に使えるビューアがほしい」と相談された3カ月後に、ビジットビューアのプロトタイプは完成した。

「わが社は、BIM導入にかじを切った設計事務所やゼネコンなどの困りごとを解決しながら成長している」と田村氏が語るように、ユーザーの要望を反映しながらビジットビューアは進化してきた。BIMモデルに注釈を入れ、モデル上で複数人がやり取りできる機能も設けた。プロパティによる絞り込み表示や図面表示も可能だ。ただし、「手軽さが犠牲になるから」という理由で見送った機能追加も多い。

使い手のワークフローに合わせやすい手軽さが、ビジットビューアの深みを生んでいる。根底には「何でもできるソフトは逆に何もできない」というゲーム業界時代に得た教えがある。BIMが高度化する中で「今後さらに共有ツールの存在感はさらに増す」と言い切る。

現在では、長谷工コーポレーションのほか、大手のゼネコンや建築設計事務所にも幅広く同社の技術が使われている。「わが社は専任営業を置いていない。皆がエンジニアであり、取引先の要望を聞き、常に期待に応える仕事をするのが会社の原点になっている」とは、今はじき創業者である父親の教えもある。

ビジットビューアの初期費用は9万8000円から、保守は年間3万円から。同社はBIMデータをゲームエンジンデータに変換する製品『BIM Importer』の販売も始めており、BIMと真正面から向き合っている。

